

まつりまち

「阿波踊り、見に行きたい。」

ひょうたん島久しぶりやな、と私が話しかけようとしたタイミングで康介こうすけがそう呟いた。「めっちゃ急やな。人混み嫌いやったのに、東京で慣れたん？」

「それもあるけど。俺、ちゃんと阿波踊り見たことないけん学校で先生に阿波踊りのこと聞かれたら困ってまうんよな。」

その時、私たちを乗せる遊覧船がカーブを描き、遠心力で身体を軽く揺さぶられた。私が思わず身につけているライフジャケットに視線を落としたのを見て、康介がくすりと笑った。びびりすぎ、と言われてしまう前にパッと向き直る。

「ほな行こうよ。私、浴衣着ていくわ。」

「それは楽しみやなあ。」

ソファに置かれた彼の細くて長い指に触れなくなっていたが、照れくさくなって、中央公園で遊ぶ子供たちがこちらに手を振るのに応じた。しばらくして、遊覧船の運転手がハンドルを操作しながら口を開いた。

「阿波踊りの時期は、この街一体の空気が変わる。東京とはまた違う騒がしさがあるですよ。」

私はその言葉に頷きながら、ある事を考えていた。

——康介は、専門学校を卒業したら徳島に帰って来るのだろうか。

私たちが付き合って一年、遠距離恋愛を始めて約五ヶ月が経った。高校時代は毎日のように教室で会えていたのに、今ではメールのやり取りと週に何度かの電話だけ。今は夏休みのため予定が合えば会うことが出来るが、阿波踊りが終われば彼はまた東京へ戻ってしまう。

遊覧船が最後のカーブを切り、徳島県庁が見えた。県庁を超えたら、すぐに船着場に到着してしまう。私は船の揺れを利用して、わざと康介の肩にもたれかかった。たったそれだけなのに、変に緊張してしまう。少し重たい、濃いオレンジ色のライフジャケットの感触しかなかったが、私にはそれだけで幸せだった。

それから数日後、八月十二日。汽車のアナウンスが終点を告げ、財布から切符を取り出す。いつもなら空いている列車内も、今日は浴衣姿の乗客でいっぱいだ。それだけでいつもの空気と違って、心が浮き立つ。徳島駅に到着する寸前、スマートフォンで自分の身なりを確認した。いつもと違うメイク、浴衣姿、特別な夜の始まり。

慣れない下駄で足元をおぼつかせながら、なるべくゆっくりと汽車を降りた。

「うわあ……。」

想像していたよりもずっと駅の中は混んでいて、毎年ながらに驚いてしまう。駅員に切符を渡し、待ち合わせ場所に進みながら周りの浴衣姿の女の子に目を向けた。赤、桃、橙色……。色とりどりの花が咲いているように鮮やかで、自分の水色の浴衣が地味に見えないかと少し不安になったが、水色は彼の好きな色であることを思い出して気を取り直した。

駅構内のショッピングプラザのコーヒーチェーン店に、既に康介は居た。私を見つけると、微笑みながら手を振ってくれた。

「ごめん、お待たせ。」

「いけるよ、暑かっただろ。ちよつと何か飲んでから行くか？」

「ううん、大丈夫。屋台のかき氷食べたいし。」

そうか、と言うように頷いてから手元のアイステイーに口をつける。

「水色やと思ったたらやっぱり茜だった。すぐに分かったわ。」

浴衣のことを言っているのだと気づき、嬉しくなって顔に熱が集まる感覚がした。この色を選んで良かった、と胸を撫で下ろす。

「六時から始まるけん、先に屋台で色々食べるで？」

現在、午後四時半。晩御飯にはまだ早いが、少し小腹が空いている。

「せっかくやけんラーメン食べたいと思つとるんやけど、どうかな？」

「それ良いね！ ちよつと早めに行ったらあんまり混まんやろうし。私、東大に行きたいな。」

東大までの道を、色々な話をしながら歩いた。お互いの学校生活、勉強、街の様子……。

康介の話に出てくるお店や音楽は知らないものばかりだった。今まで見たことの無いような楽しそうな表情。まるで、自分が居るべき場所を見つけたような話し方。ふいに、数日前に浮かんだ疑問が不安に変わり始めていることに気付いた。

もしかして、卒業した後も康介は東京に居続けたいと思っているのかな。

「茜^{あかね}も、卒業したら東京に来なよ。」

「えっ。」

そんな発想は全く無かったため、思わずドキツとした。人混みが苦手だった彼がこんなに楽しんで生活が出来るなら、きっと私も大丈夫かもしれない。また、私自身が本当は東京という都会に憧れを抱いていたのだ。それより、もしかして今の言葉は、卒業しても私

とずっと居たいという意味なのだろうか。

「あ、店見えた。」

彼の言葉で我に返り、ほんまやね、と相槌を打つ。まだ胸が高鳴っているような感覚がしているが、悟られないように振舞った。

この時間でも少し混んでいる店内に入り、私たちはカウンター席でラーメンを食べた。濃い茶系の豚骨醤油スープ、甘辛く煮た豚バラ肉、東大ならではの無料の生卵。普段はそれにライスも付けるが、今日はこの後の屋台巡りも楽しみたいので辞めておく。

「東京では生卵は乗せんし、スープも全然違うけん食べた気がせんかったんよ。」

「えっ、生卵乗せんの？ 確かに、県外の友達も珍しいって言よったわ。豚バラ肉も他所では無いみたい。」

「場所によって食べ物の認識とか感覚が違うん、面白いな。」

そんなことを話し合っていたら、あつという間に食べ終わってしまった。おかわりした水を飲みながら、ちらりと腕時計を見る。ここからまた紺屋町や藍場浜に向かえば丁度良いはずだ。

「足、痛めてないか？ 下駄で歩くん大変そう。」

「大丈夫よ、ありがとう。ほら、今からが本番やしな。」

客の出入りが激しくなる前に私たちは店を出た。まだまだ外は明るく日差しは暑くて、どこかで団扇を貰おうと決めたのだった。

会場に近づくほど、人手が多くなっていく。毎年、阿波踊りが始まる前に観客のなかから踊り子や鳴り物奏者を見つける度に、いつもあることを思い出す。

それは、小学六年生の秋の運動会のこと。五年生と六年生は、毎年運動会の最後に阿波踊りを踊る。運動が苦手だった私は、五年生の頃から鳴り物奏者に憧れていたのだ。鳴り物奏者と言っても小さな鐘とソプラノリコーダーだけで、その役は数人しか選ばれない。選考のテストまでの二週間程、私は放課後になるとすぐに音楽室に向かい、下校時間まで練習していた。その結果、リコーダー役のリーダーに選ばれ、運動会も成功を収めた。それから、阿波踊りのぞめき、鳴り物の音色やリズムが好きになったのだ。

「なあ、康介は小学校の時、運動会で阿波踊りした？」

そう問いかけても、返事は無かった。康介は立ち止まり、目を見張っている。

「すげえ……。」

漏れた呟きは小さいものだったが、しっかりと私の耳に届いた。

「阿波踊りって、こんなに人集まるもんなん？徳島じゃないみたい。」

その表情があまりに感動的に見えて、私は思わず嬉しくなった。その時、どおん、と腹の底まで響くような大太鼓の音がした。祭りの始まりである。

「そうよ。な、色々見に行こう。」

康介の手を取って、私は笑顔を向ける。普段の私では少し触れただけで照れてしまうのに、祭りの空気で大胆になれた気がした。うん、という返事が鐘の音にかき消される。

私たちは、行き交う人混みに抗うように歩き続けた。左手の冷やしパインを落とさないように、右手の彼の手を離さないように、目的地も無いままに歩く。普段は車道なのに、今だけは歩行者天国になっていて、それが何だか不思議で、当たり前のようにも思えた。

迫力のある太鼓に、歯切れの良い三味線、ポンポンと手で叩かれる小鼓、軽やかな締太鼓。そして、心地の良い笛の音。全ての音が揃ったぞめき。それに乗せて舞う踊り子たちも美しかった。上品な女踊りは糸乱れぬ足運びで、ダイナミックな男踊りは限られたスペースの中で自由に翔んでいるようだ。

彼の言う通り、徳島とは思えないような喧騒である。周りの人々の話し声は分かるが、何を言っているのかは聞き取れない。いくら東京で人混みに慣れたと言っても流石に辛いのではないかと不安になり、彼の顔を覗き込んだ時、はつきりと目が合った。

そして、私たちは思わず立ち止まった。時間の流れがとても長く感じる。まるで、私たち二人の空間だけが止まっているようだ。

「いけるで？そろそろどこかで座ろうか。」

「俺、ほんまは徳島が好きじゃなかった。」

全ての音が、一瞬消える。

「……だから、東京に行ったん？」

「それも正直ある。この町には何にも無くて、この町では何にも出来んって思ってた。

この町は狭すぎるって。」

狭すぎる、と唇で言葉を反復する。その意味を考えようとした時、繋いだ手に力が込められるのを感じ、思わずハツとした。

「でもそれは、俺がただこの町を、徳島を知らなかっただけなんやと気付いた。」

今日は来れて良かった、とはにかんだ。私は何も言えなかった。しばらく立ち止まっていたせい、足の指の間が下駄の鼻緒で痛み初めているのに気付く。じんじんとする親指の感覚、掌の熱、激しい音や声の重なり。その時の康介の笑顔は、私にとってあまりにも

眩し過ぎた。新町川の川面も、全ての情景を映してきらめいていた。

康介が東京に戻ってしまい、私は大学の夏休みの残りの一か月を持って余していた。課題も無く、バイトも無い平日。何もせずに一日を終わらせることがもどかしくなり、自転車であてもなく走ることにした。吉野川大橋の真ん中で、海のように広い川を横目で見ると、潮の匂いのする風を感じながら、東京はここからどのくらいだろうとぼんやり考えていた。新町橋まで来て、ペダルを漕ぐ足を止めた。ほんの数週間前まではあんなに騒がしく賑やかだったのに、まるで別世界のように静かである。

あの夜と、今。立っている場所は同じなのに、見えるものはまるっきり違う。あの時何も言えなかったのは、私には何も無いと思ったからだ。夢を追うために外に出る勇氣も、新しいことを知りたいという気持ちも。

いつしか、遊覧船で彼に抱いた疑問を、今度は自分に問いかけた。

——私は、大学を卒業しても徳島に居続けるのだろうか。

まだまだ先のことだとしても、きっとあつという間だろう。その間に、私は変わる事が出来るだろうか。そもそも、私がしたいことは何なのだろうか。

その時、新町川の奥の方からモーター音のようなものが聞こえた。目を向けると、外国人観光客を乗せた、あの日と同じ遊覧船だった。ぶわり、と記憶が戻るように胸がざわめいた。

気が付くと、左手にスマートフォンを握りしめて、耳に当てていた。

『もしもし、どしたん？』

四コール目で出た声は、いつもと変わらず優しかった。しかし、電話の奥は騒がしく、康介の声は小さく聞こえる。祭りのようだ、と思った。

この町は、狭すぎる。どこもかしこも、思い出に溢れているから。

私がひそかに涙を流したことを、静かな青空だけが見ていた。